

## 観楓会と紅葉狩り

函館市医師会

みずせき  
水関

きよし  
清

春に列島を北上する桜前線の基準となるのがソメイヨシノの開花状況であるのに対して、秋に列島を南下する紅葉前線のそれは、モミジの紅葉とイチョウの黄葉の出現状況によって定められるという（日本気象（株））。

紅葉前線がスタートする北海道は、その独特の鮮烈さが印象的なことで知られ、9月下旬から10月上旬にかけて、高地での紅葉がはじまる。この時期に列車で道内を移動すると、石北線や宗谷線のように峠越えの区間を含む路線では、紅葉から黄葉までが車窓をさまざまな形でよぎり、多彩な樹種の秋の装いに接することができる。また北海道の広さは、本質的に気象条件の地域差につながり、ときには早い降雪に遭遇することもある。その場合には、ツタやウルシなどの紅葉、潤葉樹ではモミジの紅葉やダケカンバの黄葉、針葉樹では落葉するカラマツの黄葉と落葉しないエゾマツやトドマツの緑、それに加えて雪の白、からなる4色の競演に恵まれることになる。

気温が低くなり日照時間も短くなると、紅葉が始まる。その機序は、以下のように説明されている。まず、光合成によって蓄えられた葉の中の糖分が、葉の根元に生じた離層に妨げられて葉の外に輸送されなくなると、葉の中のタンパク質と化学反応を起こして、カロチノイドという黄色の色素や、アントシアニンという赤い色素に代わる。次いで、葉の緑色を構成していたクロロフィルの分解が進むと、これら色素の持つ色調が優位となって、黄葉や赤葉が出現する。あわせて、昼間には十分な日射しが降り注ぎ、夜は冷え込み、かつ、木々の黄葉や紅葉を散らさない程度の雨がしめやかに降る、という好条件が満たされれば、紅葉はより鮮烈になるのだという。

たしかに、紅葉の発色の程度は、山の北側と南側とでも異なる。北海道新幹線の札幌への延伸とともに廃線となることになった、函館線の小樽～長万部間のうち、それまで寄り添っていた海岸線を離れ、果樹園が広がる余市～仁木～然別を過ぎて、銀山～小沢～倶知安へと走行する区間は、積丹半島の基部を越えるため、10月中旬ごろなら、みごとな紅葉に出逢える確率の高いところである。

列島の中で真っ先に紅葉と接する北海道には、「観楓会」という催しがある。字面だけ見ると、春のお花見のような紅葉を見ながらの集まり、と思われる観楓会だが、実際は、紅葉の名所などに一泊して開く宴会を指す。もう十分に寒い時期になっているため、赤く彩づいた木々の下にシートを拡げて、車座になって酒などを酌み交わす、というわけにもいかない。自然の成り行きで宴会は室内で開かれ、冬本

番を迎える前のひと時、懇親の場を共有して、英気を養うのである。

春の花見に対比される形での秋の紅葉見物は、「紅葉狩り」であろうか。いくつもの例外のあることを呑み込んだうえで、あらためてこの両者を比較してみると、ソメイヨシノを愛でるのは概ね平地なのに対し、紅葉の名所は山や谷の奥まった所であって、場合によっては遠出するというひと手間を要する。これらの差異が、首都圏周辺などに10月という観光シーズンを現出させていると思われる。その一翼を担う団体旅行の勧誘資料をみると、行き先は東北の十和田湖あたりから始まって、福島の裏磐梯や、日光周辺へと移り変わってゆく。「天は高く、味覚を満たす素材は多く、紅葉は燃えるように鮮やか」というキャッチコピーはともかく、「紅葉見物」という目的のために出かける時期が、ツアーにもよるが、1か月程の期間内に、3日置きくらいの間隔で設定されていることには注意が必要である。

先にふれたように、紅葉の美しさの要因には、日照時間、夜の気温、適度な湿り気という基本的なもののほか、日照や風の強さなど、当日の天候というその時々々の状況とが複雑に絡み合う。出かける前に旅行地の紅葉の具合を、あらかじめ電話で尋ねたり、当地のお天気カメラの画像などで確かめることは、旅行者と紅葉とのベストマッチを必ずしも約束しない。実際に訪れて感想を直接伝えても、結果は大きくは変わらないようである。

「この辺の紅葉は綺麗ですね」「いや、お客さん、惜しいことをしました。所々茶色っぽくなって、シワができていますから。もう少し早かったら、もっと見事でしたのに。今年は暖かくて、葉の発色ももう一つなんです」

旅行者に意地悪を言っているわけではなく、各人がそれまでに見た紅葉の記憶の中でのベストセレクションを、実際に目の前に置いた紅葉と対比させつつ、それらが混然一体となった「紅葉の美」を語っているために生じる現象なのであろう。比較の対象が「記憶の中の紅葉の美」なら、とても太刀打ちできない道理である。

実際に、眼前に置かれたひとつの美を共有する時、人々の言動はどうなるのだろうか。

拙い経験ではあるが、葉のすみずみまで紅一色に染まった枝と、中央部には豊かな黄葉を蓄えつつも周縁部には先端だけに真っ赤な紅を挿した葉が入り混じる枝とが、入れ子細工のようにして、峰々を飾る山道をめぐったことがある。快晴で、いくつもの谷筋の奥まで陽光がくまなく降り注ぎ、ひとつの峰を越えるたびに、黄色から深紅までの色彩が、多彩な変調を繰り返しながら、見るものの前に現われた。

「素晴らしい」「綺麗だ」という言葉が、互いの口の端に上ったのは、ごく最初のうちだけで、谷筋を廻っていくうちに、「今日のこの日に、この地を周遊できた」ことに感謝したい思いがそれぞれの胸中に湧き上がってきて、いつしか言葉は失われていった。

本当の美には、ヒトを黙らせる力があるのだ。